

多文化地域における生涯学習

— 多文化共生をめざすワークショップを事例として —

矢野 泉

Lifelong Learning in Multicultural Community

— The Case of Workshop for The Constructin of Multicultural Living in Harmony —

Izumi YANO

1. はじめに

本稿は、K市S地区を多文化地域とするK市F館のA企画委員会が、1999年10月23日～12月18日に主催した「識字ボランティア養成講座—ワークショップで深める識字『聴くことと話すこと』—」に関わった事例をもとに構成されている。ここでいう「識字ボランティア養成講座」は、在日コリアン一世の個人の散逸した思い出を交差させて地域文化を象徴する記録を集成し、次世代に伝達していく生涯学習者を育てるものである。

この企画の原案を提起したのは、K国際交流協会が地域社会の多文化化に力を注ぎ、F館の近隣住民でもあるS氏である。S氏は、F館をとりまく多文化地域に、全米日系人博物館⁽¹⁾のような、エスニック・マイノリティの草の根の生活史を収集・展示・伝達する場所をつくりたいと願っていた。筆者は、全米日系人博物館を研究していたためにS氏の興味をひき、企画委員会に参加させてもらえることになったのである。企画は、F館の「識字ボランティア養成講座」の予算枠を得て、ワークショップというかたちで具体化された。本稿では、このワークショップをおいながら、多文化地域における生涯学習の事例について考察し、多文化共生の地域づくりの鍵となる「集合的記憶」⁽²⁾構築にいかに取り組めるのか論じたい。「集合的記憶」は民族や世代を異にする人びとの思い出の交差である。なお、「集合的記憶」という用語は、筆者が考察をすすめる際の学術用語であって、本事例の中で企画委員会や学習者間で実際に共有されていた言葉ではない。

2. 多文化共生をめざすワークショップ

このワークショップでは、とくにF館の職員やS氏をはじめとする企画委員会のうちだれがメインリーダーということにはなかった。ただし、講座の趣旨説明を聴いたり、F館をとりまく地域の歴史や現状、在日コリアン一世の生活史について学習する場面では、F館の職員やS氏、在日コリアン一世に、講師として話してもらったり、ファシリテーターとしてワークショップを進行してもらうことはあった。ワークショップのおもしろい点は、企画する側と参加する側、講師と学習者の壁がとりはらわれているということにある。以下はS氏によって作成されたワークショップ「案内ちらし」の文面⁽³⁾である。

◆F館識字ボランティア養成講座

ワークショップで深める識字『聴くこと話すこと』

あなたは「識字」という言葉からどんな活動を連想しますか？

それぞれにこの言葉のもつイメージは違うと思いますが、この講座では、社会のなかで痛めつけられた人が「痛み」や「苦悩」の経験を語るなかで、「痛み」「苦悩」の原因について学び、克服するための知恵を獲得することと考えてみたいと思います。

ですから、この講座は、単に、「日本語」の「教え方」を学ぶのではなく、戦前・戦中・戦後を通じ、激動の歴史のなかをたくましく生きてこられた在日一世のハルモニ・ハラボジ（おばあさん・おじいさん）たちが厳しい生活のなかで獲得した「歴史」をふりかえり、みんなの地域で課題を発見し、どのような「まちづくり」を目指すべきかみんなで考えることを目的とします。

詰め込み式のレクチャーに頼らず、さまざまなワークショップやフィールドワークをおこなうなかで自分の目と耳と足と頭を使って、この地域で起きた事柄をひとつひとつ掘り起こす作業とあなた自身の経験を呼び起こす作業を重ねあわせながら、「私たちの歴史」をみんなで描きなおすなかで地域の課題をいっしょに見つけませんか？

このワークショップは、エスニック・マイノリティの「痛み」や「苦悩」を思い出とそれにまつわる資料の中にエスニック・マイノリティ・コミュニティのオリジナルな文化を映像メディアを含む文字にして読みとるという点で「識字」学習であり、差別を受けた「痛み」や「苦悩」をもつものもたざるものが、年齢や世代の壁を超えて、支配層から受けた「痛み」や「苦悩」の思い出を共有する点で、多文化共生をめざす生涯学習となっている。多文化共生をめざす生涯学習は、「痛み」をもたない、あるいは、忘却の彼方におしやろうとする支配文化と、「痛み」や「苦悩」を語り聴く対抗文化、および「痛み」や「苦悩」を経験してきた世代と「痛み」や「苦悩」についてはなにも聴かされてこなかった世代に属するさまざまなひとびとの複数の思い出の溝に橋を架け、「集合的記憶」を生成する装置である。

それでは、ワークショップの日程・内容をつぎに簡単に示す。⁽⁴⁾

●第1回10月23日（土）13:00-16:00

ワークショップのねらいが説明された。

在日コリアン一世にとっての識字の意味を考えた。

人権や差別に関して自分の記憶を辿り、印象的な出来事を絵に表現し、グループにわかれて話し合いを行った。

『1998年度在日韓国・朝鮮人の生活と声 実態調査の報告－在日高齢者聞き取り調査』⁽⁵⁾の調査員から、調査を通じて在日コリアン一世から共感したこと、学んだことが報告された。1999年夏の聞き取り調査⁽⁶⁾において収録したビデオの一部を放映し、在日コリアン一世の思い出を交差させ多文化地域の「集合的記憶」として残していく意義について説明された。5－6人のグループにわかれて、「人権」というテーマで、自己の思い出を語り、最も印象深いシーンや伝えたいイメージを画用紙に描いて、グループのなかで発表した。

●第2回10月30日（土）14:00-16:00

グループ別に別れ、在日コリアン一世から思い出を聴き、その様子をビデオに収録した。

●第3回11月13日（土）14:00-16:00

日朝韓関係史・在日コリアン一世・学習者の記憶をつなぐ年表づくり①。

模造紙大の年表の枠をF館の職員が用意。枠は左から「日朝韓関係の動き」（例えば、韓国併合、創氏改名、朝鮮独立運動、日本敗戦、外国人登録令、共和国への帰国運動、日韓法的地位協定、難民条約など）、中央枠が聞き取りした在日一世の生活史上の出来事（例えば、誕生、結婚、渡日、出産、夫との死別、仕事、病気など）、右枠が学習者の生活史上の出来事や在日コリアンにまつわる思い出を書き込む。「日朝韓関係の動き」については、F館職員が1900-1980年代までの歴史上の重要事項をプリントに刷って学習者に配布した。学習者は歴史上の重要事項を切り抜き、模造紙の「日朝韓関係の動き」の枠に年代順に貼付。在日コリアン一世と学習者の思い出の軸を時系列的に並べることで、学習者と在日コリアン一世の思い出の溝を埋めて「集合的記憶」を構築する作業をした。在日コリアン一世と学習者がどのような時代を生き抜いてきたのか、在日コリアン一世の思い出のなかでとくに重要な出来事があったとき、学習者やその家族がどこにいてなにをしていたのかという記憶を辿った。

●第4回11月20日（土）14:00-16:00

在日コリアン一世が暮らした多文化地域を学習者全員で歩いた。F館の職員から多文化地域の歴史や現状、在日コリアン一世の地域における大切な場所について学び、在日コリアン一世の語りを聴きながら個々の思い出を共有した。思い出の中の場所と現在の場所を照合させながら在日コリアン一世の当時の暮らしを想像するなど、「集合的記憶」構築をめざした。

●第5回11月27日（土）14:00-16:00

日朝韓関係史・在日コリアン一世・学習者をつなぐ年表づくり②。

1グループあたり在日コリアン一世3名を講師に招き、それぞれの思い出を交差させ、「集合的記憶」として多文化地域に伝えたい事項を年表に書き加えた。

●第6回12月4日（土）13:00-21:00

発表に向けて「集合的記憶」の作品作成。

あるグループは、在日コリアン一世の自宅にでかけて、思い出を聴き、その様子をビデオに収録したり、昔の写真や証書、道具等をみせてもらった。また別のグループは、F館の集会室で、在日コリアン一世から苦勞した仕事を中心に「痛み」や「苦悩」の思い出を聴いた。

●第7回12月11日（土）13:00-16:00

グループにわかれて前回の記録をまとめていった。具体的には、年表の完成、収録ビデオの編集など。

●第8回12月18日（土）14:00-16:00

グループで構築した「集合的記憶」の作品発表会。発表回終了後17:00からF館近くの焼肉店に場所を移して交流会をもち、ワークショップを振り返って話し合った。

★グループ1：ビデオを編集して上映。在日コリアン一世の語りの区切りでビデオをとめて、グループの学習者が語りについての解説を付した。在日一世たちの思い出のトピックは多岐にわたるので、つながりをつけるために「仕事」というテーマでビデオを編集した。在日一世の「仕事」の多くは建築現場での清掃作業である。コンクリートの破片を拾い集めるなどの作業を彼女たち

は「^{のかた}土方」と呼んでいた。夫をなくして独力で子どもを育てていく必要が生じ、キャリアも技術もない状況でまとまった収入が得られる仕事は、彼女たちにとって「土方」をおいて他になかったのである。※学習者6名

★グループ2：年表をもとに発表。徴用されて佐渡の炭坑の食堂で労働させられた在日コリアン一世の思い出が、昔の貴重な集合写真や、炭坑現場や宿舎を描いたイラストを付けてビジュアルにまとめられた。炭坑で労働をしていた当時の給金や食事代や主要なものの値段が、現代の物価状況と比較された。在日コリアン一世の夫は炭坑で労働し、妻であるハルモニは炭坑の食堂で労働者たちの食事作りに従事した。戦後は川崎へ転居し、廃品回収の仕切り場（町工場）を開き、その後はそれを人に貸して生計を立てたという。※学習者6名

★グループ3：最初にビデオにより、在日コリアン一世の昔語りを見せた。後は年表を掲げて、年表に書き込んだ一世たちの思い出のうち、グループのメンバーが印象的であったこと、気づいたこと、語りをもとに文献で調べたことなどを報告したり、在日コリアン一世の思い出を受講者がどう受けとめたのかということを発表した。※学習者5名

注4でも言及したが、学習者の顔ぶれはワークショップの回によって変わった。全回参加が受講条件ではないので、最初の1回であるとか、最初と最後の2回だけであるとか、最後の発表だけ聴くという学習者も少なくなかった。前掲「※」にあげた発表者の人数は、全回参加もしくは1-3回のみ欠席の学習者の数でもある。最初の回には20名、最終の発表会では学習者と1-2回参加のみの聴衆的学習者や見学者をあわせて40名ほどいた。各グループには企画委員会のメンバーが2名ずつ学習者として参加していた。

3. 「集合的記憶」の構築

教科書の年表に書かれているような国民国家の歴史は単一だが、個々人の思い出に根ざした地域の歴史は多様であり、個人の思い出を交差させた「集合的記憶」が重層的ではあれ、まとまりのもたないものであることが、あらためてワークショップを通して明らかにされた。たとえば、複数の在日コリアン一世の語りにでてくる「豚小屋」や「あひる長屋」という場所がひとつではなく、いくつも散在していたこともわかった。「痛み」や「苦悩」の中で生き抜いてきた在日コリアン一世でも、ひとによって「痛み」や「苦悩」の実質は異なる。多くの在日コリアン一世は差別について語るが、制度上は差別はあったが、近所づきあいなど日常生活の中での差別はとくに感じなかったと話す在日コリアン一世もいた。学習者は、社会全体の歴史、S地区という多文化地域の歴史、在日コリアン一世の生活史、「痛み」と「苦悩」の思い出、学習者の思い出、さまざまな思い出を重層的につなげて「集合的記憶」の構築を試みた。しかし、「集合的記憶」は今回は容易には構築されなかった。歴史を書いたり語り継いだり、たやすく「集合的記憶」を構築できるのは支配層である。抑圧されたエスニック・マイノリティたちの「痛み」や「苦悩」の思い出は、近年の権利拡張の時代まで黙して語られてこなかった。しかし、たとえばアメリカでは、公民権運動などの権利拡張の時代以降、記念碑的行事や展示を通して、公的な語りの場で個人の思い出が公開集積され、権力者が語る社会の歴史に対抗するマイノリティの集合的アイデンティティが探求された。日本でもアメリカほどではないが、マイノリティの集合的アイデンティティ探求の動きはすでにある。能登路雅子はたとえば「歴史と集合的記憶」についてつぎのよう

に語っている。

「戦時中の日系人の強制収容体験は、最近まで日系人の記憶のなかで抑圧されてきた。当事者の多くは収容体験について黙して語らず、収容所生活にまつわる罪悪感や恥辱から子孫や孫たちを守ろうという姿勢が『集団的記憶喪失』の状態をもたらしていた。日系の家族史のなかの白紙のページについて、三世たちが問いかけをはじめたのは、1960年代から70年代にかけて、アメリカの多様なマイノリティ集団が権利拡張を推進した時代であった。『巡礼』や『追憶の日』などの行事をとおして、収容所の墓地修復、記念碑建設、見学会も活発に行われた。さらに、1981年から開かれた『戦時民間人転住・収容に関する委員会』の聴聞会において多くの日系人が初めて収容体験を公的な場で語ったことも、それまで連邦政府や日系アメリカ人市民協会（JACL）が作り出してきた日系人史とは異なる多様な証言を歴史の表面に浮かびあがらせる結果となった。二世の歴史家ロナルド・タカキはこのような個人的な体験の集合化プロセスの産物を『記憶の共同体』と呼んでおり、自分の歴史を語り、自分を無視し拒絶した歴史に対する対抗的ナラティブが生まれる過程で集合的アイデンティティ探求が活性化すると論じている。戦時補償運動のなかで1985年に日系の民間組織として設立された博物館で行われた強制収容所体験の展示企画は、日系人にとって歴史的記憶喪失からの回復をめざしたものであり、個人史の集積をコミュニティ内部からの集合的な物語の再構成につなげる重要な契機となった。…日系人の強制収容に関する展示は、個人とコミュニティの『記憶』をめぐる多くの示唆を含んでいる。記憶のもつ政治的意味合いについては、1980年代以降、歴史学だけでなく哲学や政治思想史の領域でも大きな関心を集めてきた。一般的に言って『歴史』はアカデミックな訓練を受けた専門家により実証性に関する一定のルールのもとで研究分析され、書籍や学術誌のかたちで記録されるかたちであるのに対し、『記憶』は出来事を実際に体験した当事者がそのときの心的生活と結びついた思い出として保持されているもので、それが記録される場合は日記や書簡、オーラルストーリーなどのかたちをとる。」⁽⁷⁾

被抑圧者が思い出したくない辛い収容体験を公的な場で語り、その語りが集められ、支配層の創った歴史に対する対抗的ナラティブすなわち抑圧された側から語る歴史物語が創られていく。この過程はワークショップにおいて学習者たちが在日コリアン一世と共にめざしたことである。

ワークショップでも、書簡、写真、証明書、オーラルストーリーなどが、「集合的記憶」構築の史料となった。語られることのなかったそれぞれの在日一世の辛苦の記憶をクローズアップさせて思い出を聴き、その思い出と学習者たちそれぞれの思い出とをリンクさせつつ、そのつながりについて語りあい、多文化地域の「集合的記憶」として結実させていった。発表会では、F館の館長が、「在日コリアン一世の生活体験の重さに助けられた発表」と講評した。たしかに、「集合的記憶」の構築といっても、在日コリアン一世の個々人の思い出の中の「痛み」や「悩み」を寄せ集めたもので、個々の思い出の交差をはじめS地区の社会史とリンクさせるなどの試みは成功しなかった。さらにいえば、学習者自身がはじめて接する一世たちの「痛み」や「悩み」の深さに圧倒されていたため、それらを学び自分たちの記憶にとり込むことに懸命であった。地域の社会史との照合ないし新たな地域史の創造は今回の学習者の限界を超えるものであり、今後に残された課題であったのは当然ともいえよう。

しかし、在日コリアン一世の記憶に埋もれていた「痛み」や「苦悩」の思い出を掘り返し、「集合的記憶」の作品として集積していくという学習は、学習者にとって意味のあることである。

在日コリアン一世の高齢化はきわめて深刻であり、生存者は在日コリアンのうちおよそ5%に過ぎず、その割合は年々小さくなっているという。こままでは、つぎつぎと失われていく貴重な在日コリアン一世の「痛み」や「苦悩」の思い出が次世代に「集合的記憶」として伝えられていかない。さらに、今回のワークショップで残された課題を引き継ぎ、地域の社会史とも交差させられるような「集合的記憶」を構築するには、語り手を数人の在日コリアン一世からさらにひろく広げる必要があるし、在日コリアン一世の「痛み」や「苦悩」の思い出がどのような意味をもつものなのかその裏付けを他の歴史資料と照合することも必要になるだろう。

さて、S地区の地域歩きは、エスニック・マイノリティー・マジョリティ間、世代間の思い出の溝に橋を架けようということに、学習者の関心が最もむけられた時だった。学習者はカメラやデジタル・カメラをもって案内役のF館の職員についてまわった。カメラ等をもっていたのは、在日コリアン一世の思い出の場所の写真を「集合的記憶」の年表に貼り付けるためである。地域歩きでは、F館をとりまく地域の市販地図のコピーと「S地区フィールドワーク」という資料⁽⁸⁾が配付された。◆以下がその引用である。S地区に隣接するI町とH町も地域歩きに含まれた。

◆F館：F館は、市民運動と行政がパートナーシップを結び、民族差別をなくし、豊かな地域社会をつくるため、そして、すべての人が自分らしさを回復し豊かな仲間づくりを行うため、多くの市民のさまざまな創造的な活動を行う踏み台・ステップ台としての働きをつくっていきたいと願っている。F館をとりまくS地区とそこに多文化地域を作り上げてきた市民運動・地域活動の背景をぜひ知ってほしい。

↓

◆K教会・S保育園：F館を作り上げた市民運動・地域運動を生み出した拠点。保育所を中心とした在日コリアン二世の母親の子育ての叫びから地域活動が始まった。「わが子だけは自分のような辛い少年期を送らせたくない。本名で堂々と人間らしく胸を張って生きていってほしい」本名を呼び名乗る地域活動がこの保育園から始められた。今、在日コリアンのこどもたちと日本人のこどもたちの新しい関係づくりから、コリアンだけでなく民族や国籍、障害のあるなし、さまざまな違いを持つマイノリティのこどもたちの多文化保育実践へと深められている。

↓

◆S商店街：日本の社会矛盾が集積する地域にあって、新しい世代がこの地域から去り、地域全体が活力を失おうとする状況に、もっとも敏感に小店主が反応。活力ある地域を取り戻そうと、在日コリアンがたくさんすんでいる地域のうりとしていこうと取り組み始めている。商店街には、コリアの乾物屋も数件あり、季節に合わせた民族料理に適した食材の販売もこの商店街ならではの。

↓

◆S小学校：15%のこどもたちが韓国・朝鮮籍。日本籍者も含めると2割強、3割くらいになるうか。ふれあい教育（韓国・朝鮮人教育）の推進校。体育館の裏には韓国の花むくげが立ち並ぶ。

↓

◆K朝鮮初中級学校とその周辺：1945年解放後、朝鮮人の手によって民族教育が始められた。厳しい戦後史の中で、民族教育を守り育てるために、官憲とも対峙せざるをえないほどの厳しい

歴史を担ってきた。その伝統がある学校であり、地域も共和国帰国運動発祥の地として在日の民族運動の歴史のある地域である。



◆I町：K市の最南端に位置し、他の地域から産業道路・高速道路に遮断されている。生活路に沿って這うように細長く形成された在日コリアンの街である。日本鋼管をはじめとした軍需産業にかりだされたコリアン労働者の飯場として出発したといえる。300世帯900人ほどの居住で半分がコリアン住民。工場敷地内住居として出発し、住環境整備の問題が大きな課題としてある。大きな道路で遮断されているため、在日コリアンの歴史文化を感じさせるよさも含みながら、I町ゆえの地域的な差別の生活実態がある。



◆セメント通り・焼肉街～水門通り：重労働で働かされた在日コリアンのスタミナ食、どぶろく一杯のみやとしてスタートした焼肉屋は、同じく厳しい労働を担う日本人住民の支持を受けながら拡大発展し、地域社会に根付いてきた。焼肉屋さんが共生の地域社会づくりに活力を得て、中華街のような「コリアタウンを！」とコリアタウン実現を目指す焼肉料飲業者の会を結成し、精力的な活動を行っている。隣の水門通りには、この会によってむくげ（韓国国花）とオオシマレンゲ（共和国国花）が植えられている。

このうち「桜本小学校」の「15%のこども…」のデータは10数年前のもので、現在では、インター・マリッジや帰化の結果、日本国籍のこどもが増えて、割合が変化しているという説明が、職員からなされた。

コリアタウンとしてはセメント通りに立派な門が建てられているが、あまり人通りはなくにぎやかな雰囲気はない。コリアタウンらしさを醸し出していた一軒だけの貴重な民族雑貨店は客の入りが悪く昨年になって店を閉めた。焼肉店が集まっているといっても、密集しているわけではない。夜ともなれば中華街のように街全体がネオンで明るいことはなく、数件の店の灯りがぼつぼつと夜闇に浮かび上がる程度である。コリアタウンからは活気を感じなかったが、学校や保育園、教会、F館、S特別養護老人ホーム、S公園などの公共施設には、ひとがよく集まっている。I町は生活が不便なところで地価が安いと聴いていたが、空き地のようなスペースはなく、住宅が密集していた。住宅は小型の家が多く、そうした住宅を間をぬうように曲がりくねって狭い生活路が走っていた。生活路が狭すぎて自動車が通れず、住民は高架下の比較的ひろい道路を駐車場がわりに使うという問題もある。

地域を歩くフィールドワークでは、多文化地域のさまざまな面が見ることができたが、企画の段階で予想していた在日コリアン一世が暮らしていた昔のS地区・I町・H町の過去の実像を在日コリアン一世や他の地域住民の思い出をたよりに再現し、「集合的記憶」の地図を作るということにはならなかった。フィールドワーク中に話しを聴いたのは在日コリアン一世とF館の職員からで、それ以外の地域の住民から聴きとることはなかった。

ここにはいかに個人のばらばらな思い出を交差させて地域の社会史とも交差させ、地域全体の活性化につながるような「集合的記憶」を構築するかという問題がある。この問題を考える場合には、やはり能登路雅子の前述の考察が示唆的である。その考察では全米日系人博物館が取り上げられているが、あわせて注目したいのはアメリカの先住民であるアクチン族の博物館の事例で

ある。

この博物館はアクチン族の居留地に建てられている。1991年に誕生した「アクチンの生活様式」と称する博物館は、「計画当初に部族の人々がもっていた『箱のなかの閉じられた文化』という博物館のイメージとは対照的に、それは地域の自然や生活の変化に応じて進化する住民参加型の新しい博物館コンセプトを体現したものだ。太陽熱を利用したコンピュータ制御の灌漑技術など、外部からの見学者と共有しうる普遍性をもつ展示も制作されたが、博物館が最もインパクトを与えたかった対象は部族の若い世代だった。自分たちがほぼ喪失しかけた大地や水との絆を可視的に示すことで、博物館はコミュニティの人々に自己発見の場を与えた。『農業が我々に希望をもたらし、博物館が過去を記憶する新しい道を開いた』という部族のことばにもうかがえるとおり、博物館は単なるノスタルジアの象徴ではなく、この少数集団のアイデンティティと文化的再生のための新たな『記憶生成装置』としての機能を果たすようになった。先住アメリカ人居留地の言うなれば手作りのコミュニティ博物館は、従来の博物館のアカデミックな伝統からは逸脱したものといえるかもしれない。しかし、近年、博物館の展示は事実の並列ではなく、過去についての人間の情動や神話的記憶を共同化し、将来へのモデルを提示する場所⁹⁾ だという議論がある。

さて、この博物館が「記憶生成装置」として地域の歴史と人々の「集合的記憶」を結びつける機能を果たしている最大のポイントは、この博物館が居留地という隔絶された地域に作られているという点であろう。その地域の住民はすべてアクチン族であるということが、生きた「集合的記憶」を構築しやすくしているのではないかと。ところで、本事例ではどうか。そこに住んでいるのは在日コリアンだけではない。歴史的に在日コリアンが集住してきたが、日本の他の地域に比べて…ということであり、実際は日本人住民との混住である。在日コリアンばかりだったといわれる第二次世界大戦前のI町にしても日本人住民がまったくいなかったわけではない。また、アクチン族の居留地の場合には地域内での民族差別はないと考えられるが、S地区・I町・H町の場合は過去に差別があり、現在でも差別がまったくないわけではない。たとえば、I町などでは、在日コリアンであることを隠して日本人の名前の表札を出している家もいまだ少なくないことから、差別の残存がわかる。アクチン族の居留地ではだれもがアクチン族であるということが明らかであり、エスニック・マイノリティの昔語りを抑圧するような民族差別は存在しない居留地においてアクチン族の個人的な思い出や地域の社会史との交差により、「集合的記憶」を構築し、居留地を活性化することは比較的容易なことではなかったか。

閉ざされた居留地という場ではないマジョリティである日本人とエスニック・マイノリティである在日コリアンが混住する地域において「過去についての人間の情動や神話的記憶を共同化」していくために必要な作業、それは、差別が根絶されて、エスニック・マイノリティが安心して「痛み」や「苦悩」の思い出を語り、「集合的記憶」を構築していけるような多文化共生の地域づくりである。「S地区フィールドワーク」の資料の説明にも、「民族差別をなくし、豊かな地域社会をつくるため、そして、すべての人が自分らしさを回復し豊かな仲間づくりを行うため、多くの市民のさまざまな創造的な活動を行う踏み台・ステップ台としての働きをつくっていききたい」と書かれている。

このワークショップは、F館の「識字ボランティア養成講座」という場であったからこそ成立した。しかし、F館のみがそうした「踏み台・ステップ台」である現状から、地域そのものがそ

うした場へと変わっていくことが、「すべての人が自分らしさを回復し豊かな仲間づくり」ができる条件となろう。幾世代もの地域の住民が、在日一世が地域で体験した辛苦にみちた過去の記憶を地域に活力を与える希望へと発展させていくことができたという企画の意図があった。在日コリアン一世の「痛み」や「悩み」の思い出は地域で語り継いでいく文化遺産である。

ワークショップの企画の段階では、在日コリアンの後続世代をはじめ地域住民の若い世代層の参加を呼びかけ期待した。ところが、S地区・I町・H町に住む10-20歳代の若い世代はこのワークショップには参加しなかった。学習者は、バスや電車で地域外から通う20-50歳代の人々で、過去にF館のハングル講座や人権尊重学級に参加していたり、学童保育のボランティアをしているなど、すでにF館とのつながりをもつ継続的な学習者たちであった。また、F館になじみがない学習者としては、大学院生など研究者たちの参加が目立った。住民としてこの地域に関わりがある学習者は、企画委員のなかの2名である。F館のある職員によれば、F館の生涯学習講座に参加する学習者は、このワークショップに限らず、概ね地域外の成人知識層であって、地域の若い世代層が呼びかけにとびつかないというのは、めずらしいことではないという。

4. 結び

このワークショップでは、アクションの事例にみられるような住民参加型の「集合的記憶」の構築はできなかった。しかし、むしろ、全米日系人博物館の事例からは学びとれるものがある。ワークショップの「ちらし」のなかでは、「みんなの地域の課題を『発見』し、どのような『まちづくり』を目指すべきかを考えることを目的とします。…この地域で起きた事柄をひとつひとつ掘り起こす作業とあなた自身の経験呼び起こす作業を重ね合わせながら『私たちの歴史』をみんなで見つけよう。描きなすななかで地域の課題をいっしょに見つけませんか？」と書かれているが、学習者がほぼ全員地域の外からワークショップに参加しているという状況で、実際に住んではいない地域を「みんなの地域」としてどこまで関わっていきけるのかという問が立てられよう。

しかし、地域外とはいえF館とは多文化共生への関心においてつながりがある学習者たちである。F館はこの地域を多文化化していく重要な拠点であり、そのF館とつながりを持ち続けるのは、この地域に暮らしていなくとも、真剣にこの地域と関わるということである。全米日系人博物館もロサンゼルスのリトル・トーキョーの一角にあるが、地域住民はこの博物館にそれほど興味は示さない。そのかわり来館者は全米各地や世界中からやってくる。日本の高校がスタディー・ツアーの訪問先としてこの博物館を選ぶこともあった。一方で、博物館の存在すらしなかったという地域住民もまれではない。全米日系人博物館が想定している地域とは特定の生活圏ではなくて、日系人の記憶や歴史、文化に関心をもつ全世界の仲間とのつながりである。全米日系人博物館では、そのつながりをコミュニティと呼んでいる。コミュニティには、民族、国籍、世代に限らず、日系人でなくても、支配層の歴史に対抗するエスニック・マイノリティの「集合的記憶」の構築に関心を持つすべての人々に開かれている。このワークショップでも、全米日系人博物館を参考にメモリアル・コミュニティが想定できるのではないだろうか。

地域をそのようなコミュニティとしてとらえるならば、アクションの事例と共通する条件がなくても、この地域を「みんなの地域」ということはできる。全米日系人博物館は現在のリトル・トーキョーの住民生活に密着しているわけではないが、博物館の建立場所が、強制収容されるまで

日系人が心の癒しを求めて居場所にしてきた寺院の跡地であり、強制収容所行きのバスの停車場であったことなど、コミュニティにとってきわめてメモリアルな場所に存在し、「集合的記憶」生成装置となっている。S地区でもかつて共和国への帰国運動が盛んであったなど在日コリアンの個々の思い出をむすびつけるメモリアルな基盤はある。メモリアルな基盤を、このワークショップでの試みに関心をよせる人々が、いかに生かしていけるかが、S地区の多文化地域としての将来像を示す鍵になるであろう。

最後に、多文化地域における生涯学習の事例を考察する機会を筆者に与えてくださったF館ワークショップの関係者すべての方々に記して感謝し、稿をとじたい。

注

- (1) 全米日系人博物館はアメリカ、ロサンゼルスの数多くの日系企業経営者と、第二次世界大戦退役軍人やその家族たちにより、民間非営利団体として、1992年に、ロサンゼルスのダウンタウンの一角、リトル・トーキョーの日系人社会にとって歴史的な建造物であるロサンゼルス初の仏教寺院を改修して創設された。この建物は1985年以降国家重要史跡にも指定されている。この寺院は、日系人が強制収容所に抑留されるまで、日系人の信仰、社交の地であり、文化発信の基地として日系人社会の中心であった。強制収容所にむかうバスもこの寺院前から出発していったという歴史もある。この博物館の目的は、日系人の豊かな遺産と文化を保存し、日系人が差別を受けて体験した苦難と痛みを、全米の市民、世界中の人々に共通の貴重な教訓として後世に伝えることである。1999年には全米各地の日系人の寄付により新館が開館した。所蔵コレクションは、生活道具、文献、写真、映像、口述記録など、日系アメリカ人に関するさまざまな事物が世界最大のコレクションとして保存されている。移民当時から昔の生活道具や衣装、日常を撮った映像、学校の教科書、強制収容所で使われていた生活用品、写真、収容所での生活を撮った映像などの多くが、日系一世、二世の家族から寄付されたものである。また、口述記録や人物映像など学芸員が中心となって消えつつある日系一世、二世の世代についての資料の収集を急いでいる。博物館のなかの常設展示は一世の移民当時のものと二世の強制収容所時代のものがメインで、強制収容所のバラックを博物館の側の駐車場で再現するなどの野外展示も行う。アメリカ社会の差別的処遇の象徴でもある強制収容所を体験した日系人に対する謝罪と補償を要求した1980年代の戦時補償運動に関する展示もある。展示は一世、二世の世代に関する内容が充実しており、三世～五世に関する資料の収集・展示については今後の課題であるという認識を博物館はもっている。能登路雅子も指摘しているが、この博物館では強制収容をはじめとする差別をめぐる記憶と言説が多角的に並べられ、日系人に限定せず、過去に差別の対象となったあらゆるエスニック・マイノリティ集団の個々人の次元の記憶や史料まで射程におかれている。

以下に博物館が主催する主なプログラムを示す。

- 公共プログラム：日系人の文化に造詣の深い知識人やアーティストを招き、レクチャー、パフォーマンス、ワークショップ、パネルディスカッションなどのイベントを行う。
- ナショナル・スクール・プロジェクト：教材作成、教師トレーニング・セミナーなどを通じて、全米の教育機関に日系人の歴史と文化を伝える。

- ローカル・オンサイト・エデュケーション・アクティビティーズ：教育機関や他のエスニック・コミュニティからのグループ来館者のリーダーに日系人の歴史と文化についての事前説明を行う。
 - エデュケーション・ギャラリー・アクティビティーズ：折り紙講習など文化継承活動を行う。ボランティアや来館者が自由に情報交換するたまり場としての機能をもつ。将来的には日系人にちなんだおもちゃを収集して遊び道具を通して子どもたちの世代に日系人の文化を継承していく場になる。
 - ライフヒストリー・プログラム：日系人の歴史の証言者たちの語りを音声や映像で記録し後世に伝えている。
 - 国際日系研究プロジェクト：日系人社会における文化発展の軌跡を各国からの日系人研究者が調査しその情報を一般の人々に提供していく共同作業。
 - ナショナル・リソースセンター：所蔵する文献、ビデオ、写真、新聞、雑誌、マイクロフィルムなどのライブラリーである。強制収容所に収容されていた日系人の家族や子孫は、収容された自分の家族や先祖の個人情報をパソコンで検索できるシステムもある。
- (2) 「集合的記憶」の概念については、後掲する能登路雅子の著作のほかに、アルブヴァックス・モーリス（小関藤一郎訳）『集合的記憶』行路社、1989年などが参考になる。
 - (3) 「F館識字ボランティア養成講座ワークショップで深める識字『聴くこと話すこと』」A企画委員会、1999年10月（未公刊）
 - (4) このワークショップの参加者は各回でばらつきがあるので詳述しないが、平均するとおよそ17名であった。
 - (5) 川崎在日韓国・朝鮮人の生活と声調査部会『川崎在日韓国・朝鮮人の生活と声 在日高齢者実態調査報告書（1998年度）一』社会福祉法人青丘社、1999年
 - (6) 川崎在日韓国・朝鮮人の生活と声調査部会を継承するボランティアグループ。『川崎在日韓国・朝鮮人の生活と声 在日高齢者実態調査報告書（1998年度）一』が在日コリアン一世からの聴き取りを調査部員が書き起こしたかたちでまとめたものであったので、趣向を変えて「痛み」や「苦悩」の思い出を自ら語る在日コリアン一世の映像をそのまま記録に残すことを目的に結成された。同グループは、1999年8-9月に在日コリアン一世3家族の自宅を訪問して、居間でくつろぎながら語る在日コリアン一世たちや食事の風景、記憶を呼び起こす昔の書簡、写真、証明書、家具などをビデオ収録した。メンバーは、三浦知人、金迅野、趙充得、金恵媛、三国恵子、加藤孝夫、湯浅利啓、矢野泉。
 - (7) 能登路雅子「歴史展示をめぐる多文化ポリティクス」油井大三郎・遠藤泰生編著『多文化主義のアメリカ』〔アメリカ研究叢書〕東京大学出版会、1999年、pp187-208.
 - (8) 「S地区フィールドワーク」A企画委員会、1999年11月（未公刊）
 - (9) 能登路雅子、前掲書(5)pp204-205.